

## 歴史と形態變化：ゲーテ研究の一齣

佐藤，通次

<https://doi.org/10.15017/2556545>

---

出版情報：文學研究. 33, pp.41-52, 1943-12-30. 九州文學會  
バージョン：  
権利関係：



# 歴史と形態變化

—ゲーテ研究の一齣—

佐藤 通次

形態變化 (Metamorphose) の考は、ゲーテが自然研究において達した輝かしい想念である。それは自然を解體的に部分的な存在に固定して見る仕方に対して、全體的な生命として見るのである。生あるものと見るのは、見る生命が、見られる自然において自己に對する對等の生命を見るのであるから、生命の一種の自己把握となり、従つて自覺の意義を有するのである。解體的な見方はあくまで他覺の立場にとどまるのであるが、ゲーテは自然を對象とするに當たつても、そこにわが生命と通ずる生命を看取したのである。ゲーテの世界觀は世界の生動的 (dynamisch) な把握であるといふことができる。

たとへ自然において生々發展を見るときでも、なほそこに解體的な立場を宿して、自然現象を向上發展の諸段階の羅列とする考へ方も成立するのである。しかしゲーテの考へ方は決してさやうなものではなかつた。彼の見る自然の生々發展は、たとへばリンネの植物分類學におけるやうな自然の系列ではなくて、一の根元の命の開展する現象の種

々相であり、彼の見方は、自然界を内部から、「それ自身の中から」又は「形成の根本的法則の中から」その独自の「諧調」において、有機的に理解することであつた。<sup>1)</sup> 然らば有機的とは何ぞ。ゲーテは有機體を定義して、「生ける統一體」と名づけてゐる。即ちそれは、「生ける」といふ意味においては動的であり、「統一體」であるといふ點においては全的なるところの存在であつた。

1) 一七八四年六月十七日シャルロッテ・フォン・シュタイン宛書簡。同年十一月十一日ヘルデル宛書簡。

2) *Maximen und Reflexionen* (箴言と反省) 五七一。

## 二

一切の生命現象が生ける統一體の發展であるとするれば、歴史といふものも、それが生命の現象であるかぎり、やはり有機的生命的發展として見られるほかはないこととなる。ゲーテは世界を有機的に把握する上の考を、更に存在の全領域に及ぼし得るやうに考へた。「わたしの原理はあらゆる場合に適合し、一切のものを開明する」これは『伊太利紀行』に見えるゲーテの自信の言葉である。<sup>1)</sup>

形態變化の考は、存在を生成として見るから、解體的見方における對象の空間的固定に反して、存在を時間の中に在るものと見る。リンネ式の系列の考では、發展の時間的契機すらも捨象せられて、時間の縦の流が、横の斷面として並列せしめられてしまふのであるが、ゲーテは常に發展における統一を見失はず、現象の多様をも嘗てこの統一を去らぬものとして把握した。統一を失はぬ現象の開展は、時間的に連續するものとして現れるのである。この時間に

おける生成が人事であるとき、ここに本来の意味における歴史が成立するのである。またこれに對して、自然といへども時間的生成を成すものとしては、廣義における歴史の生を示現することとなる。ゲーテは人間の歴史的事象をも自然現象に含めて考へたが、その事はまた、自然現象をもある意味において歴史として捉へる事を裏に伴つた。ゲーテには『宇宙に關する物語』(Roman über das Weltall)の構想が存するが、その草案や斷片は、世界といふこの「奇妙に複合された球」を探究し、そこにおける一切の箇々のものを全く歴史的に、といふのは「世界の諸時期に對應するやうに、排列」せんとする意圖を示してゐるのである。この點からオスワルト・シュペンゲルは、ゲーテを「自然の偉大なる歴史家」と呼んでゐる。<sup>1)</sup>

1) コッタ版全集第二十七卷一〇四頁。

2) ここから「根源現象」の考が生じてゐる。

3) 一七八一年十二月七日シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人宛書簡。一七八二年十月二十七日及び一七八〇年十月十一日メルク宛書簡。

4) O. Spengler, *Untergang des Abendlandes* (西歐の没落) 第一卷二〇七頁 (一九二三年版)

### 三

すべての生命は有機的に統一されてゐる。この信念からゲーテは人間の及びその歴史の發展を、他の一切の自然的事物との「嚴密なる聯關の下に」<sup>1)</sup>理解しようとしたのであつた。その際、勝義における人間の歴史が自然の發展史の中に吸収され、人間の生の開展と生物的生命的發展との間に明確なる區別が立てられなかつたのは、ゲーテ的史觀

の特色を成すのである。ゲーテがイタリアの旅において、古代の大いなる美術作品を見て、「人間によつて眞實の自然的法則に従つて生み出された自然的作品」<sup>2)</sup>と嘆賞した言葉には、自然に隨順する人間の事行が、自然的展開さながらの妙境を示す事を表白せるものとして、たとへば親鸞の自然法爾を聯想せしめるのであるが、ゲーテにあつては、「自然」といふ言葉があくまで生物的自然の意味を超脱せぬのである。従つて、親鸞の人生體驗的に比し、觀照的氣分が濃く、親鸞の情意的に比し、知的色彩が勝つのである。ゲーテにとり、歴史は生が自己自身を實現する仕方なのであり、他のあらゆる仕方と同じく、所詮は最も廣い意味の生でふ唯一の概念に従屬すべきものであつた。<sup>3)</sup> カッシーレルが適切にも言ひ表してゐるやうに、ゲーテは常に自然的形態を生の形態として感得し且つ解釋してゐる如くに、人間の歴史的生活形態をも、それ自身の中に上昇と下降との法則と尺度とをもつ自然形態として把握するのである。<sup>4)</sup> ゲーテにとり、歴史の原動力は、すべて法則性を具有して臨む「働く自然」そのものであつた。<sup>5)</sup>

- 1) 一七八四年の論文 *Über den Granit* (花崗岩について) を参照。コッタ版全集第四十卷八頁。
- 2) *Italianische Reise* (イタリア紀行) コッタ版全集第二十七卷一〇八頁。
- 3) コッタ版全集第三十九卷十頁以下參照。
- 4) E. Cassirer, *Freiheit und Form* (自由と形式) 一九一七年版二八五頁。
- 5) Lehmann, *Goethes Geschichtsauffassung in ihren Grundlagen* (ゲーテ的歴史把握要論) 九七頁。

## 四

ここに吾々はゲーテの歴史觀に對する批判に移らねばならぬ。歴史はゲーテの考へることく、單に生成するもので

あらうか。歴史は連續する時間の中に成立するといふ面からは、あくまで生成と考へられるであらうが、それはオゾカラ成るものではあるまい。本來の意味における歴史、即ち人間の事象としての歴史は、人事を盡すといふ事行の空間的・時間的體系なのであつて、そこにはミヅカラの責任の立場が含まれるのである。歴史が生成であるとしても、その生成は自覺の立場を含まぬ自然の現象なのではなくて、人間のミヅカラの事行の重層を内容として含み、その體系的開展としての生成でなくてはなるまい。ゲーテにはこの點に關する明確な洞察が乏しく、ゲーテの考へ方は全體として人事を自然の中に沒せしめることに傾いた。この傾向はその裏に、人間を禽獸と次元を同じくする生物の面において見る事を伴ふ。彼は生物研究において、人間を禽獸の連續的發展の系列に置いて考へ、人間の間顎骨を發見するといふ功績を擧げた。しかし歴史を考へる際は、さういふ見方ではなく、人間を禽獸を次元的に超える生命として把握しなければならぬ。人間と他の動物との骨骼の同一は、「人間は動物と最も近縁のものである」事を證明するかも知れぬが、動物の肉體的構成はそのまゝ人間の身體的本質を成すものではない。勿論、歴史の全體は生成の相を呈し、また歴史は自然的條件に大いに制約されるのであるが、制約されるといふのは、繫縛化・支配化にあるといふのではない。自然に制約されることは、むしろ自然を超越せんとする主體的生命の發現を、超越される對象の側から裏打するものとして考へられるのである。

ゲーテが人間を動物の一種として考へた事は、ゲーテと共に自然の形態變化の想念に没頭しつつあつたヘルデルが書いた『歴史哲學への理念』(Ideen zur Philosophie der Geschichte)の發端にも明らかに現れてゐる。ヘルデルはここで人間の獨特の自然的制約と體制とを考へ、自餘の生物と比較して、人間を動物的發展の「最高の且つ最後の肢

節」とし、直立して歩行する動物として定義したのであつた。ヘルデルのこの考はゲーテの自然研究から得るところ多く、彼は一七八四年五月初旬にヘーマンに對して、ゲーテの激勵の言葉なくしては、自分のこの書(第一部)は「生まれぬものの冥府」(Hades des Ungeborenen)の中に留まつただらうと述べ、ゲーテ自身も、一八〇九年フルクとの談話の際、ヘルデルの上の書の第一卷、「特にその發端には、わたくしから出た理念が多い」<sup>2)</sup>由を語つてゐるのである。

1) 一七八四年十一月十七日クネーベル宛書簡。

2) Goethes Gedanken, aus seinen mündlichen Äußerungen zusammengestellt von W. Bode (第二版、一九〇七年) 第二卷二六五頁。同じ箇所になほ「この問題は當時吾々によつて共同に論議された」といふ言葉も見えてゐる。

## 五

ゲーテの自然觀は有機的自然觀と稱せられる。歴史をも自然的發展の一樣相として解する彼の歴史觀は、必然的に有機體的歴史觀となつたのであつた。その事を明らかに示すものは、一七八四年にゲーテが『秘密』(Geheimnisse)の題の下に描かんとした原型の人間フマヌス(Humannus)の性格であらう。<sup>1)</sup>この者は、神によつて選ばれた賢者であり聖者であり、すべての箇人の歴史を一身の中に具現すると共に、十二の修道士の姿に示現する人間の生の各部分をおのれの中に告知するものである。

有機的の人間觀は必然的に人間の箇體主義的の把握を伴ふのである。なんとせば、有機體とはそれ自身の生ける統

一として考へられる生命體であつて、他の生命體との必然的な繋がりにおいて考へられるものでないからである。この考へ方は、多くの箇人の超越的統一を、箇人の奥に求めようとする。そこに「原型」の想念が立つのであるが、この原型の人間は、あくまで觀察の客體であり、従つて對象性を脱することがないのである。ゲーテの原型人の考は、自然研究における根源現象の考と同じく、プラトンのイデアの想念に通ずるものと見られよう。但しプラトンにおいては、イデアはあくまで形體無きものであつたが、ゲーテにおいては、イデアすらも形體的に考へられたのである。

すべての原型の人間は箇々の人間の奥に考へられる理想の姿であつて、箇々人はいづれも不完全なものであり、この理想的人間の低次の反映なのである。「全體なるものは皆一の全體ではない」(das Ganze ist nie ein Ganzes)<sup>2)</sup>しかしすべての民族・すべての時代は、人間の原型と歴史の原型とを百千の多様な姿で映すものである。フマヌスは到る處で生きてゐる。吾々はこのフマヌスの生に與るとき、純人間に立返り得るであらう。

かくして、人間の原型を箇人の奥に見る考は、人間の理想を純人間として立てるに至るのである。ゲーテはヴィンケルマン、ヘルデル及び新人文主義者たちのすべてと軌を同じくして、人間の理想を古代人に見たのである。古代を觀照することにおいて人は「最も純粹な状態にある人間のもとに連れ戻される。それによつて觀察者自身が生き生きと且つ純人間的となる」<sup>3)</sup>

1) コッタ版全集第一卷二八七頁以下。

2) 『イタリア紀行』コッタ版第二十七卷四頁(一七八七年ヘルデル宛の書簡)

3) 同上、二六七頁(一七八八年四月)

## 六

ゲーテは人間及び歴史の多様の現象形態を展開するところの根元の一を、わが前に立てて見たのである。わが前に立てるといふことは、見る働きの対象とすることであり、存在の格においては物格、時間の様相においては過去とすることである。(邦語において昔が對であることも思ひ合はされるであらう) この事は必然的に、歴史において主に過去の事象を見る事と、史實に對して純粹に主觀的な歴史感を以て臨む事を歸結する。ゲーテは數千年の「神聖な過去の遺物」を、古くから傳はつた遺産として鑑賞したのであつた。それは過去を身に預り、現在を立派に實現する事によつて、將來の歴史をも品位ある生たらしめる爲であると思へられたにしても、過去はあくまで現在の中に包攝されるものであつて、現在の生の原理たるもの、即ち現在を生むものではなかつたのである。かく過去の歴史的事象を自己に對する主體的生命として立てぬ立場は、逆に過去の史實に對して形成的態度で臨むことになる。ゲーテにとつては、過去の史實は、自己の藝術的創作の資料としてのみ活かされるものであつた。故に、ゲーテに對しては、史實に對する歴史家の客觀的立場を期待することはできない。その事は彼の歴史『タッソー』や『イフィゲーニエ』を取つて見ても明らかであらう。後者は古代の傳説に題材を採つたものであるから今は措くとしても、十六世紀に現實に生きた詩人タッソーを取扱つた後者において、ゲーテの意圖せるものは、タッソーとアントーニオとの二つの性格の永遠の對立を表現する事であつて、箇々の史實の奥に貫き入つた純人間的なものを藝術的に形成することが、歴史に對するゲーテの立場であつたのである。形成される人間は、純人間的なる原型の人間の一契機の展開を代表するもので

あつて、その意味では、原型的人間のいはば形態變化を表示するものであつたのである。

箇々の史實に即して永遠の理念を表現するといふことは、すべての藝術的形成に通ずるのであるが、歴史に對してかく形成的立場に立つ以外の見方をなさなかつたのが、ゲーテの特色であり、それはまた、彼の歴史觀の、遡つては彼の自然觀の當然の歸結でもあるのである。ゲーテにシルレルの歴史研究の如き業績の無い事も、ここから理解し得るであらう。

1) コッタ版第二卷九四頁。

2) 同上第一卷五頁。

## 七

吾々はゲーテとは別に、人間の箇性の多様及び現象の多彩を開展する根元の一を、前に立てて見るといふことをせず、これを背後に立つものとして背負ふことができる。これによつて、根元の一は、わが主觀の中に包攝される事を免れて、眞に超越的な生命として立つのである。そして、この超越的な生命を負ふわれは、その生命より開展せるものとして、それにおいてわが親を仰ぐのである。但し、仰ぐと言つても、背後に立つわが親はこれをわが眼によつて見ることはできぬが、これを憶持する事を假に見るによつて表して、仰ぎ見るといふのである。わが前に立つもの (*Vorstellung*) はすべて我によつて低次のものとして見下されるが、わが背後のものはいはば見上げられるのである。

わが生命の開展は、わが背後の超越的生命の與ふるものである。それは命を與ふるものとして、まさしく親なのであるが、わが生命の開展とは、禽獸の自然的生の開展ではなくて、事行的生命の開展なのであるから、われに命を與ふる背後の生命は、同時に、われに事を命するコトバであるべきである。ここに、漢字の「命」の字が、口と令との會意から成り、もと命令のコトバを表し、轉じてイノチの義となつた事が、意味深く思ひ合されるであらう。人間の歴史の原理は實にコトバなのである。

超越的生命のコトバを聞く者は、そのコトバに聽いてみづからも主體的生命として行爲するのである。これにより、對象を見る體驗が箇體主義に陥るのに對し、コトバを聽く體驗は超箇の生を實現するものとなるのである。

超箇の生の實現とは即ち團體の生活である。團體の生活の究極するところは國家であるから、歴史は國家の生命の實現として現成するのである。その際、わが事行的生命を命じて歴史的生命を開展するコトバは、君として現れたまふのである。更に、君命じ民これに隨順する生命の開展を命する根源のコトバとして、肇國の神が天地の發端に立ちたまふのである。かくの如きの理を具現し、眞に歴史の名に値する生を開展するものが、皇國日本であつて、この意味で人間の歴史とは皇國史にはかならぬのである。しかも、それはゲーテが對象的に考へたやうな歴史の原型といふごときものではなく、一切の歴史の背後にあつて、これに能産的立場を以て臨むもの、即ち歴史の親たるものである。故に、皇國史は歴史にして歴史を超ゆるものである。即ちそれは超時間的のもの、永遠のものである。

しかしここに言ふ永遠は、一の觀念として對象化された存在的性格のものであつてはならない。それは常に新たなる事行によつて常に新たなる存在を生むもの、即ち無窮の開展である。皇民<sup>みん</sup>われは、無窮開展を令したまふ、皇祖神

の神勅を奉じ、その時々<sup>とき</sup>の皇の大命に隨順して、無窮開展を時間の中に實現し、以て永遠に參するのである。

## 八

上の論述にはおのづから三つの史觀が現れてゐる。第一は、解體的な見地に立つ

### 科學的史觀

であつて、史實の調査に基づく實證的史學が、自己の原理を史觀にまで高めたものである。我々はそれの科學的操作の方法は採つて生かすべきであるが、史觀としては採るべきでない。なんとすれば、歴史は人生の事であり、單に知の對象とされる域を超えるからである。

第二のものは、史實の奥に永遠に人間的なるもの又は純人間的なるものを見る

### 形成的史觀

であつて、一切の歴史を、原型的人間の生の形態變化的發展と見るものである。上述のごとく、ゲーテの史觀はかくのごときものであつた。これは歴史的生の箇體主義的把握であり、われ他人<sup>ひと</sup>が生命の一體に生きる勝義における歴史の本質を把握するものではない。歴史は對象的一の形態變化又は發展と考へらるべきものではなく、主體的生命の背後に立つ一の超越的生命の開展と考へらるべきものである。その低次の一面として一のもの<sup>もの</sup>の發展の相も現れるのである。故に、最も高き史觀は、第三の

### 開展史觀

でなくてはならない。この史觀の實現が即ち皇國日本である。そこにあつて、一切の歴史的生命を開展する根源の生命は、神・皇・祖ミコ・祖ミヤの一如であつて、それはコトバとして働き、開展せられる箇の生命は、神に對する人、皇に對する臣、親に對する子の立場において、それに隨順して各々の創造を營むのである。故にそれは、隨順史觀又は創造史觀とも呼ばるべきものである。